
姫と勇者と魔道書と

Salt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫と勇者と魔道書と

【Nコード】

N7614X

【作者名】

Salt

【あらすじ】

魔王の娘と勇者が織り成す冒険モノ、暇つぶし程度に楽しんでも
ええたら幸いです。

素人の上文才がないのでまとまりのない内容をお許しください

プロローグ

これはどこか遠いところのお話。

人間と魔人と呼ばれるヒトが住む世界。

二つの種族は交流こそ少なくとも争うことなく暮らしていました。しかし、あることをきっかけに大きな戦いが起きてしまいます。

圧倒的な力を見せ付ける魔人の軍勢と数で勝る人間たちの軍勢。

一進一退の攻防が続き、戦火は大きくなりつつありました、

そんな中たった一人の戦士が魔人を率いていた魔王を討ち取ること
で戦いは終結しました。

後に人間と魔人の初の武力衝突として語れる事となる出来事。

まだほんの10年前の事。

一話

十年前に起こった戦いは、人間と魔人の戦争「人魔戦争」と言われるようになった。

あの戦いで人生を大きく狂わされたヒトは多いだろう。

私もその例外ではない、だが私の事情はかなり特別、自信を持って言える。

代々魔人を治めてきた王族の血筋の中でも最強を謳われた人物。

長きにわたって保たれてきた魔人と人間の均衡を乱した史上最大の戦犯。

私はその魔王の一人娘なのだから。

大陸同士を結ぶ港町。

港では大小の船が忙しく出入りしているし、街中には露店が数多く並んでいる。

そんな活気に満ち溢れた雰囲気には似合わない人影がひとつ。

茶色の薄汚れたローブを身にまとい手には旅行カバンのような大きな荷物を持っている、

魔人特有の色白の肌に黄色い瞳が覗いているが、フードを深くかぶっているため人相はわからない、

ただ背丈や体格などから年端も行かぬ少女ということだけはわかった。

「申し訳ありませんが、身分を証明出来る物がないと乗船を許可するわけには参りません」

「そう．．．ですよね、無理言っすいません」

全く面倒な事この上ない。
まあ今時得体のしれない魔人を易々と船に乗せるほど馬鹿な者もいないでしょう。

人魔戦争終結から2年ほど経った頃だろうか、魔人によるテロ行為が起こった。

犯人は人間を劣等種とみなし、魔人こそ至上と考える魔人至上主義者達と睨んでいるけど、
世間はそうは考えない、魔王を崇拝する残党軍によるものではないか？と。

しかし本当に崇拝しているだとすれば、父上の遺志逆らってそんな事をするとは到底思えない。

いずれにせよテロによって、人間社会における魔人の見方は大きく変わってしまった。

人間の間でしか使われていなかった身分証明書は、魔人にも発行を義務付けられた。

結果、テロの回数は激減し、かつ魔人も人間社会で動きやすくなったというわけ。

ただし、動きやすくなったのはまっとうな魔人、私は話が別。

そしてその影響で今まさに困り果てているのだが、定期船を使わず大陸へ渡るにはどうしたら。

密航？いや見つかるかと面倒だし、あるいはどこから船を拝借して
．．っ！

「あつ、すいません」

「．．．」

考え事をしながら歩いていたらヒトとぶつかってしまった、私とし

た事が。

しかし、この男、ぶつかっておいて無言とは癪に障る奴ね、まだ理不尽に怒る奴のほうがマシだわ。

「んあ．．．悪かったな」

男は今ぶつかった事にようやく気づいたかのように謝ってきた。

みればこの男、この街は比較的温暖な気候にもかかわらず、ロープで身を包んでいる、

私のようにフードこそかぶってはいないが、ふつうこの街でそんなものを着ている者はそういない。

顔から判断するに20代半ばかしら、まあ顔立ちは悪くないわね、だが驚くほど無表情だ。

まるで．．．

「生きてるのか死んでるのかわからない奴ね」

「よく言われるよ」

はっ！つい口に出てしまった、ていうかよく言われるってこいつ。

「ちよつと来て」

さすがになんだか申し訳なかったので、私は男の手を引き酒場へと連れ込んだ。

「さつきはその、本当にごめんなさい、謝礼としては安いかもしれなにか何か奢るくらいなら．．．」

「お前、金あるのか？」

酒場に来るまで終始無言だったくせに、なぜそこで突っ込むの？

「いや、あの・・・」

「そんなら無理するな、別に俺は金に困ってるわけじゃないしな」

何故か男へ奢るはずが奢られてしまった、もう恥ずかしさで死にそうだ。

しかし所持金がないのも事実、身分を明かせぬ上人間社会に疎い私が金を稼ぐ事が出来るわけもなく。

先程も身分証明出来ない上に乗船の代金をまけてくれという無理を吹っかけていたのだけど。

「お前、さっき船着場でも見たな、確か乗船を断られていたろ」

「え、はい」

「見たところまだ十代か？今時そんな格好じゃいつぞやのテロに間違われるぞ」

格好については貴様に言われたくない、ていうかこんなしゃべる奴なのこいつ？

「私はあんな非道で無粋な真似はしない、たしかに身分明かせぬゆえに断られはしたけど」

「人に一杯奢るにも苦勞する奴が船にのれたのか？」

「うう・・・持ち合わせも足りませんでした」

変なところで鋭い、なんなのこの男。

「金はない、身分も明かせない、でも船に乗りたいか、ならいい方法があるぞ」

「本当？」

「本当だとも、お前魔法は使えるんだろ？」

「使えるけどなぜわかったの？」

「その首のリングにはまつてる宝石、それ魔力を増幅させるやつだろ？」

「うんそうよ、よく知ってるわね」

一族が代々継いできたこの宝石は、父上の形見でもある、当主が常に身につけるとされているため、私は首のリングにつける形で身につけている、またその男の言っており魔力を増大させもする。

「まあ善は急げだ、まずは行こう」

「行こうってどこへ？」

男は行き先を告げずに店を出る、結局礼もろくに出来てない私はその後が続く。

二話

さつきも言ったとおりこの街は温暖な気候のため暖かい。

そんな街をローブに身を包んだ2人組みが歩く姿は間違いなく怪しく映る。

現に周囲の視線を感じずにはいられない、だが男はそんなこと気にも留めず話を始める。

「お前さては人間社会に疎いな？」

「まあ、必要なかったしね」

魔王の血筋に連なるものが人間社会に出て行くなど誰が想像できたか。私自身も出来なったからこそ、人間社会の常識に関して学んでいないのだけど。

しかしつくづく勘のよい男だこと。

「しかしなぜそう思ったの？」

「身分は明かせずとも力さえあればどうにかなるところがあるんだがな」

「そんなところが？」

「人間社会に通じていれば普通は知っていて当然の場所なんだが」

「世間知らずで悪かったわね、それでいまそこに向かっていると」

「そう冒険者ギルドの出張所にな」

魔物や野生動物達が街の外を闊歩するこの世の中、力のない人たちが外に出て行くのは危険だ、
だが危険であつても行かなければならない事もある、物品の輸送や素材の採取などいい例だ。

とはいえ軍は国土と国民を守る事で手一杯、いちいち国民の頼みごとを1つ1つ聞いていたらきりがない。

そこで出来たのが冒険者ギルド、腕に覚えのある者達が軍の対応出来ない細かな問題に対応する。ギルドは国家とは独立した機関になつており、ギルドメンバーには様々な権限が与えられる、また完全実力主義のため経歴を問われず、元犯罪者等でも加入が可能だ。

「その権限のなかにはギルド員の証が身分証明としても使えるというのもある」

「うん」

「その上船はもちろん、馬車や汽車などの交通機関の利用料金も格安だ」

「うんうん、それはいい事尽くしじゃない」

「まあもちろんある程度依頼をこなさなければ権限も剥奪されるのだが」

「今だけどうにかなればいいわよ」

そして目的の冒険者ギルドとやらにやってきたのだが

「本当なら権限の悪用を防ぐために色々手続きがあるんだが、ギル

ド員の紹介ならあっさり済むはずだ」

「ということはあなたもギルドメンバーなの？」

「まあな、ここの人も知り合いだしどうにかなるだろう」

建物に入るといかにもな感じで大きな剣を携えていたり鎧に身に着けた者達でこつた返していた、ちらほらと魔人の姿も見える。

人ごみを抜けるといくつかカウンターがあり、その中の新規登録受付に向かった。

「この子をギルド員に推薦したいんだが」

「なら紹介者の証明書の提示を．．．とと、特級のルーク様ですね、たたた、ただいま申請書をお持ちしますう」

なんかあの受付嬢途中かみかみな上にやたら慌ててたわね、特級って言ってたけどあいつもしや大物？

ひとまず疑問は押さえ込み申請書なるものを書き終え提出、メンバーの証明書の発行に少しかかるらしいので待つことに。

「ルークっていうのね、あなたの名前」

「名乗った覚えはないんだが」

「ギルド員の証明書が見えたの」

「お前はロースって言うんだな、小生意気な口をきく割には可愛い名前だ」

「な、私も名乗ったはずは・・・」

「申請書書いてるときにな、まあお互い様だな」

なんてやり取りをしていると発行が済んだのか呼び出された。

「これがローズさんのギルドメンバー証明書となります」

手のひら大の羊皮紙には私の名前等の個人情報と有効期限に空欄のままの箇所がいくつか、そして左上に大きく「F」と書かれていた。

「有効期限は依頼達成時に更新されます、あとこれを紛失されますと・・・」

「このFってなに？」

「えっとそれはギルドランクとされるもので、依頼の達成状況等からなる格付けでFはAの6段階あります」

「ふうん」

「ローズさんはたった今作りたてなので最低ランクのFランクというわけです」

「あとここなんだけど所持権限一覧って空欄なんだけどこれってどうやったらかつくの？」

「権限に関しては各国の信用問題もあるのでC級以上の者にしか・・・」

気づけばルークの元に足早と向かっていた

「登録したのにだめじゃない」

「ああはいはい忘れてたな」

空欄の目立つ私の証明書をルークに見せつけ問い詰める。

「これな、犯罪者が悪用出来ないように簡単には利用できないんだ
った」

「それで、どのくらいでCランクまでいけるの？」

「一年で一つ上がればいい方かな」

「長すぎるわ、それだったら手漕ぎのボートでも漕いだほうがマシ
よ」

とはいえ本当に手で漕いでいくわけにもいかないし、かといって悠
長にランクを上げてるわけにもいかない。

「なにか一気にCランクまで行く方法はないの？」

「ないこともないが」

「あるの？」

「いや・・・」

「なんでもいい教えて」

私は依頼関連の受付に立っていた。

「そのあなた、内容はなんでもいいから、FからCくらいに飛び級できるような飛び切りの依頼をまわしなさい」

「はい？」

「悪いな、無理と言ったんだが聞かなくてな」

「は、はあ」

「ただ今高ランク向けの依頼となるとこれしか・・・」

受付の担当員は棚から詳細が記された紙を取り出し、私はそれを奪い取るようにして受け取る。

内容は近隣を荒らしている大型の魔物の撃退または討伐、証拠として何かしらの戦利品を持ち帰ること。

「なによ、実にわかりやすい内容じゃない」

「いやこの大型の魔物というのが、Aランク冒険者のグループでも逃げ出すような強敵でして」

「構わないわ、請けさせて」

「はあ・・・」

ルークの同伴を条件とすることで許可を得て、なんとか依頼を請け

ることが出来た。

三話

数時間前

「なにか一気にCランクまで行く方法はないの？」

「ないこともないが」

「あるの？」

「いや．．．」

「なんでもいい教えて」

「過去にDランクの冒険者が大物を仕留めた事でBランクまで、
2
ランクアップを果たした例は聞いたことがある」

「つまりランクに見合わない敵を倒せばいいのね」

「だがその時は偶然出会ってしまったから仕方なくだったというし」

「ちょっと受付に行つて来るわ」

「ちょっと話を聞け．．．」

依頼書に記された街の外の街道へとやってきた。
ちらほらと馬車などもいてそれなりに人通りが多いみたい。

「港町ということもあつて物資の搬出入が多ようだな」

「たしかにこの人通りを襲われたらたまらないわね」

「しかしまあ、よくあんな無理が通つたもんだ」

「その無理が通つたのはあなたのおかげだけだね」

再び数時間前

「構わないわ、請けさせて」

「はあ、しかしいきなりFランクの者にこの依頼は・・・」

「そしたらその依頼、俺が請けるから俺とこいつの2人パーティで挑むならいいか？」

「それでしたらなんとか・・・」

というわけでルークのコネに甘えて無理矢理請けたのだ。

「今まで見た目で判断してたけど、あなたがそんな実力者とは思わなかったわ」

「なにがだ？」

「特級、要は言葉通り特別な階級って事でしょう？」

「まあな、一応ギルドでは最高峰のランクだ」

「人は見かけによらないわね」

「生きてるのか死んでるのかよくわからん奴だからな」

まだそれを引いてるのか、暗そうなくせに皮肉は吐くのね。

「そつえば依頼書にあった大型の魔物って？」

「一応情報をもらったきたんだが」

出没する魔物はケルベロスだな、近隣の森を住処に、襲っては退散の一撃離脱を繰り返しているらしい。

また火への耐性が高いようで森ごと焼き払うなどの手段が通用せず、軍も頭を悩ませているようだ。

「ふん、ケルベロス程度の雑魚に手を焼くとは案外軍も大した事ないのね」

「魔物の中では比較的上位に分類されているのだが」

「そんなの秒殺よ、一瞬よ」

ここまで自信満々に言われると頼もしくはあるが、同時に不安でもある、本当に1人で大型の魔物と対峙出来るのかと。

「そつえばお前は当然魔法を使うんだよね？」

「そんなの当たり前じゃない」

「準備はいいのか？」

魔人が使う魔法とは、身体に宿る魔力を使い周囲の自然に干渉する事で物質を操り、術とするものだ。

多くの場合は魔法を効率よく使うために、集中力を高めるために杖を用いたり、炎の魔法なら火を灯したいまつや、水なら水筒、風なら扇など、属性に合った道具を持ち込んだりするものだが、彼女はなにも持っていない。

「準備？私に武器はいらないわよ」

「いやそうではなくて・・・」

そのとき遠方で雄たけびが聞こえた、ケルベロスが現れたようだ、こちらの敵意に気づいたのか真っ直ぐ走ってくる。

外見は黒い毛の犬のようだが頭が3つある、そしてなにより大きい、まだ距離が遠いがそれでも大きさはわかる、10mはありそうだ。

「いいからそこで黙ってみてなさい」

右手を前に突き出し魔力を集中させる、こんな雑魚程度に時間を食うわけにはいかない、一瞬で終わらせる。

周囲の温度が下がり始める、温暖な気候にもかかわらず、ローブを着ていても肌寒さすら感じる程に。

そして次の瞬間には襲い掛かるケルベロスは時間が止まったかのように静止していた、凍っているのだ。

「驚いたな、ここまでとは」

「ま、こんなもんね」

そういつてばちゃんと指を弾くと凍ったケルベロスは徐々にひび割れていきやがて霧散した。

「さて、戻りましょう」

「いや待つんだ」

「なによ」

「達成報告のための戦利品はどうするんだ？」

「え？」

目撃者多かったため一応は達成の扱いとなった、無事Cランクへと昇格し、身分証明書として使える権限を手に入れたのであった。

「全くなによあの受付の女、「あの、それでは達成したことになりませんので・・・」なんて、しかも報酬金は半分、私はきっちり仕留めたっていうのに」

「普通はあんな大きな魔物を跡形もなく消し去るような真似なんてできる奴いないからな」

そもそも依頼を請けたこと自体がイレギュラーな上に、報告は半端、達成扱いにしてランクを上げてもらえただけでも十分感謝すべきと思うのだが。

「だけどこれでやっと船に乗れるのね」

「だがあの場にいた目撃者を捜すのに大分手間取ってしまったからな、次の便は明日だ」

夜の街を歩き、宿へ向かう。

酒場では仕事帰りの人たちが酒を酌み交わし、店の演奏家達が音楽を奏でる。

昼間とは違った活気に溢れている。

そんな街中をロープを着込んだ2人組が歩く、周囲が暗くなったおかげで怪しさ8割増しだ。

「宿へ行く前にどこかで何か食べないか」

「賛成、なんかお腹減ったわ」

酒場では酒のつまみのようなものばかりなので、カフェのような店にはいる事にした。

店員の案内で席に着き、メニューを手に取り注文を・・・

ローズも同じく席に着いたのだがメニューには目もくれず、何かを戦々恐々とした顔でみつめていた。

「何をしてるんだ・・・」

「あれは、なに？」

視線の先には隣の席の子供が食べているチョコレートパフェがあった。

「パフェっていうデザートだが、魔人の国にはないのか？」

「あんなものは初めて見たわ」

会話を交わしてはいるもののローズの視線はパフェから全く動かない。

「やめろ、子供が恐怖で凍り付いてる、お前も同じものを頼めばいいだろう」

「うん」

改めていうが、今俺たちはローブを着ている、周囲は涼しげな薄着をしている人しかいない中だ。

そのうえローズは顔を隠したいのだろう、フードを深くかぶっている、そんな格好で目をギラつかせながら見つめられたら子供じやなくとも怖いだろう。凍らせるのは魔物だけで勘弁してくれ。

ルークはサンドイッチ等普通の軽食を、ローズはチョコレートパフェのみを注文。

「おおお、これがパフェ・・・」

「そこまでパフェを拝むように見る奴は初めて見たよ」

ローズは一口食べると笑顔と驚きの両方が同時にきたような複雑な表情をすると。

「おいしい・・・」

一言だけ呟くと、無言で食べ始める。

本人は気づいてるかかわからないが俺には見ていた、一口また一口と進むに連れ複雑な表情から徐々に満面の笑みへと変わってゆく様を、こついうところは普通の女の子だな。

「ルーク、こんなものは生まれて初めてだわ」

「ふふ、パフェぐらいで大げさな」

そこでまたローズが一瞬驚いた顔になる、どうした？また違うデザートでも見つけたか。

「あなたもちやんと笑うときは笑うのね」

「俺が？笑ったか？」

「やっと無表情の死んだ顔以外の表情を見せてくれたわね」

とうに感情表現など失くしたかと思っていたが。

食事を終えたあと再び宿へと向かう。

しかしあいつあれとは別にもう2つパフェを食べていたが、大丈夫か？

「ギルドと契約してる宿屋がそこにある、Cランク以上は格安だぞ」

「報酬が入ったとはいえ節約はしたいし、そこがいいわね」

受付で手続きをし、部屋へと案内してもらう、荷物を置くとどつと疲れが押し寄せてくるようだった。

なんだかんだでルークに振り回されっぱなしだし、久々に派手な魔法もつかったし。

「それじゃ俺は隣の部屋借りてるから」

部屋のドアを開けようとしているルークを私は引き止めた。

「あの、今日は色々ありがとう、すごく助かった、感謝してる」

「そりゃどうも、明日は船乗って向こうの大陸だからなゆつくり休んでおくんだな」

「え？一緒に来る着なの？」

「そのつもりだったのだが、この先道案内は要るだろう？」

たしかに感謝はしてるけど正直付きまとわれても気味が悪い。

「あなた、なぜそこまで協力してくれるの？」

「理由がなければだめか？」

「女の1人旅に付きまとう男は不安、という言い方をすればわかってももらえるかしら？」

「ずいぶん直球だな」

そういうとルークはゆつくりとこっちに近づいてくる、身を引くが壁を背にしてくるため逃げることなど出来ない、追い詰められた、ルークの手が迫りそのままフードを脱がされる。

「お前が魔王の娘だから、それが理由だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7614x/>

姫と勇者と魔道書と

2011年10月21日15時06分発行